

体育の学習内容に関する検討

— 学習概念の転換〈学び〉を契機として—

佐久間望美*・鈴木 直樹**

キーワード：学習内容、体育、身体、構成主義、かかわり

1. はじめに

体育科・保健体育科の目標（文部省、1998）に「心と体を一体としてとらえ」という文言が加わったことにより、運動領域と保健領域の関連が強調された。また、「体操」に変わって、「体ほぐしの運動」と「体力を高める運動」によって構成される「体づくり運動」（文部省、1998）が導入された。とりわけ、「体ほぐしの運動」は「心と体を一体としてとらえ」を直接的に反映しているともいわれる（村田、2001／川口、2000）。さらに、「心と体を一体としてとらえ」る学びは、従来のような脳（精神）が「体」をコントロールする（技能）という心身二元論的な考え方からの脱却を意味し、構成主義的な学びへの転換が図られたことをも意味するとも言われる（Light、2008／細江、1999／鈴木、2008）。ここで取り上げる構成主義的な学びとは、あらゆるものは全て関係によって構成されているという考え方である。例えば「体ほぐしの運動」では、ペアでストレッチを行うことでかかわり合う他者とお互いに相手の息遣いや脱力の様子を感じたり、自らの体の状態を感じたりしようとする関係によって、「仲間との

交流」する意味や自己や他者への身体への認識が気づきとして構成されている。

しかし、「体ほぐしの運動」以外の運動領域では、未だ実体化した【種目】という視点から学習内容が導かれる傾向が強いために、「心と体を一体としてとらえ」た構成主義的な学びの姿が不明瞭になり、この文言が学習指導要領で明示されて10年以上たった今も、「精神は心」、「動きは体」という分離した構造から学びを捉えているのが現状ではないかと思われる。その結果、学習内容のモノ化が進み、構成主義的な学びの基盤にある心身一元論的な身体観という視点を欠落させてしまっているように思われる。そこで、本研究では体育科の目標の大前提として掲げられた「心と体を一体としてとらえ」た授業の実現のために、心身一元の存在としての身体という視点から学習内容を検討していくことを目的とする。

研究は、文献の検討と事例研究によって行う。

まず、心身一元の存在としての身体という視点から構成主義の立場に立つ学び論を検討し、学習内容を把握する為の基盤となる体育における学びの構造を見出す。そのため、本研究では主に構成主義に立つ学び論に基づきながら体育の授業における身体性を文献によって検討していく。また、身体性を検討する際には、構成主

* 埼玉大学大学院教育学研究科

** 東京学芸大学健康・スポーツ科学講座

義的な学びの考え方と通じる、世界との関係の変化という視点から身体を論じている市川浩と他者との関係から身体を捉え、関係そのものについても論じている大澤眞幸の文献の検討を中心とした。

次に、構成主義的な立場に立つ関係論的な授業を実践する事例を取り上げ、明らかとなった学びの構造から心身一元の存在として学ぶ具体的な姿を検討し、学習内容を捉える窓を導いていきたい。

2. 体育の学びの検討

2.1 これまでの体育の変遷

1977年（昭和52年）の学習指導要領改訂から「楽しい体育」が提唱されてきた。永田（1990）は楽しい体育においては「運動の特性を学習内容の中核に位置づけたうえで、技術や戦術、ルール、マナー、そして施設・用具などその運動をめぐる文化的な種々の要素を周辺的な位置に置き、中核的な内容である特性と関連づけて学習させることが必要になる」と指摘している。ここでは、プレイ論を基盤にする運動の欲求を充足する機能に着目した機能的特性に着目し、子どもが運動に内在される固有の面白さに触れることを目指す、運動を目的とした体育への転換が図られた。

一方、2008年（平成20年）に告示された学習指導要領（文部科学省、2008）では、ボール運動・球技の内容が、従前の「種目」から「型」で示された。このような内容優先の考え方は、どの運動領域の中にも見られ、児童・生徒の実態に応じた運動の取り上げ方の弾力化が図られるようになった。このような流れの中で、例えばボール運動・球技では、戦術的アプローチに注目が集まっている（岩田、2008／鬼澤ら、2008）。これは、Griffinら（2005）によれば、「構成主義」に立つ学習アプローチとされる。また、その目的は“Acquisition of knowledge”（知の獲得）から“Construction of meaning”

（意味の生成）へと転換し、“Teacher-Student interaction”（教師－学習者）という相互作用のみならず、“Multidimensional interaction”（多様なかわり：自己－他者－モノ）における相互作用による教授へと考え方が転換している（Griffin、2005）。例えばボールゲームでは、伝統的に学習とは「ドリブル」や「パス」、「シュート」という「技能」や「ルール」などの「知識」を個人が獲得することによってゲームのおもしろさに触れることができると考えてきたのに対し、構成主義的なアプローチでは、学習者がゲームの中で「いま－ここ」の自分の力を発揮して運動のおもしろさを探求する中でパスやドリブルなどの技能を発揮し、ゲームの変化において手段として発揮している技能や認識が変化していくことを学びと考えているのである。

2.2 構成主義的な学習

Lave&Wenger（1993）は、知能や技能を個人が習得することではなく、実践共同体への参加を通して得られる役割の変化や過程そのものであるとする正統的周辺参加を唱えている。また、佐藤（2000）は学びを対話的实践としてとらえ、自己、他者、モノとの三身一体の学びであるとする。さらに、佐伯（1995）は、人（＝I）は他者（You/他者）との共感を通じて、文化的実践の世界（They）を知ることを学びとする「学びのドーナツ論」を提唱している。これらに共通しているのは、自己や他者、モノに対して拓かれる身体によって、その拡がりの違いである質に学びの豊かさを求めている点である。つまり、脳が体を操作して技術を獲得するのではなく、「いま－ここ」の場における主体としての私が身体として思考し、「その場」にあることを学びととらえている。これは、従来のように身体を二分法で捉え、個体が技術と知識を主体的に習得していくと考えることの限界を示す。すなわち、学びに参加する学習者の身体と身体が出会い、対話し、場を形成し、学びを展開すると考えられる。これは、「身体の

操作」ではなく、「身体が身体と共にある場」を体育では、問題としなければならないことを意味する。換言するならば、学びは個人的な出来事ではなく、関係による集団的な出来事として主体の身体と主体の身体とのかかわりによる間身体性に注目をしなければならないということでもある。

2.3 心身一元的な身体の変化としての学び

このように学びを捉えると、例えば体育の「ゴール型」の授業においてボールを持たない子がパスをもらおうと空いている空間（“スペース”）に走り込むようになるという学びは、仲間と得点を競い合うゲームという間身体的な場で、防御を突破する、突破させないという関係が形成され、その中でスペースに走り込むとパスがつながることを発見し、身体（「私」）が変化したものであるといえる。このような身体の変化を、市川（1993）は世界とのかかわりの構造から「身による世界の分節化」と同時に“世界による身の分節化”である＜身分け＞として説明している。すなわち、ゲームにおける他者との関係の中で自己が＜身分け＞されたために、“スペース”というパスを受けるために有効な、意味ある空間が分節化され、同時に自己も空いている空間を意味ある“スペース”として認識する文化的な身として分節化されたといえる。

このように考えれば、授業の中で“スペース”に走りこもうとする意味や動きがクラスの中で広まり、全体に出現しだすというのは、複数の子どもが共に学ぶ間身体的な場において、最初は誰かが見つけた「良さそうな」動きが次第にクラス全体に共有化され、クラス全体が＜身分け＞したものといえる。

この集団の＜身分け＞について、大澤（1996）は、求心化／遠心化作用を媒介とする間身体的連鎖は、固有の実体性のあるものとして立ち現われ、内属する諸身体に社会的な規範の選択性の帰属点として機能する超越論的な身体の座へ

と転態することがあるとして「第三者の審級」という概念によって説明している。

すなわち、“スペース”を使うことが共有化され、それがクラスの中で受け入れられ、公共性を得ることにより、第三者の審級としてクラス全体を＜身分け＞させ、変容させたといえる。このような間身体的なく身分け＞や第三者の審級による共同体の＜身分け＞は、他者や場との関係の変化を表すものであり、間身体性を視点として、運動する身体を捉える上で大きな手がかりを与える概念であると考えられる。

2.4 間身体的な場における学びの構造

この＜身分け＞や第三者の審級という視点から学びを捉えなおすと、学んでいることは、間身体的な場において他者やモノとの関係によって「私」が＜身分け＞し、第三者の審級によって共に＜身分け＞する「私たち」が構成される中で生成されているとすることができる。そして、このような「私たち」の学びが生成されると、各個人ではなく共同体として共同体自身が学びを組織していくと考えられる。なぜならば、大澤も述べるように、「私たち」の規範はそれまでの個人の学びの経験の結果生み出されたものであるにも関わらず、規範として生成されると同時に、これからの「私たち」の学びを既定し、方向付けていくからである。

そこで、本研究で問題とする間身体性を鍵概念とする構成主義的な学びを以下のように学びの構造として整理する。

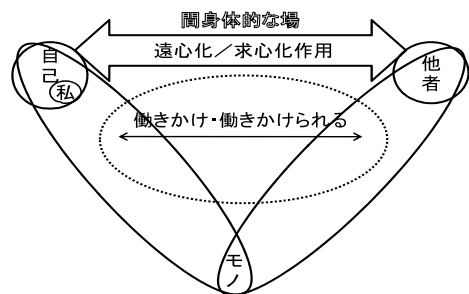


図1 心と体を一体としてとらえた学びの構図

すなわち、学びは、間身体的な場における自己・他者・モノの関係によって自己が「身分け」されるとともに、自己・他者・モノが1つの共同体として構成された「私たち」が「身分け」されていくという構造をも有しているといえる。

3. 心身一元の学びからみた学習内容

3.1 心身一元の学びをみる視点

これまでにも、心身一元的な存在としての身体に着目した体育の研究は行われてきた。久保(2005)は、体育によって「身をもって共感(共鳴・共振)できるからだ」を育て、「他者と共生・連帯して生きる人格を形成」すると共に、それを支える「身体的・感性的基盤(指向性)を与える」ことの重要性を主張している。これは、他者とともにある身体として育つことを目指した取り組みといえる。また、杉本(1997)は「異化と他己を通して、間身体的な存在としての自分の身体を認識することこそ、体育で学習すべき課題」と述べる。すなわち、他者の身になって学び育つことを意味しているといえよう。このように、従来の研究では、他者性への気づきから、からだの学びを捉えようとしてきたと考えられる。また、滝沢(2005)は、体育においては「ものや人と具体的にやりとりできる賢い[からだ]」を育てる必要があるとし、

そのために、「道具の扱いがわかる」、「他者とのかわりが分かる」、「状況が分かる」ことが必要であると述べる。これは、身体の育ちとして学びを捉えているものの、外化される外側に広がるからだである心身一元的なパフォーマンスをその対象としているといえる。しかしながら、三者ともに、身体のかかわりとしての学びを他者性の獲得の中で取り上げ、検討していることに共通点がある。

また、石黒(1999)は「モノや他者に融合し、わかり、異化される生成的存在」である、「プレイする身体」を視座とした体育授業では主体としての身体が現れ、運動における他者やモノ、自己との共感的な関わりの生成契機があったことを実践報告している。すなわち、学びの内容は、学習者が他者やモノにかかわろうとする主体的な働きかけの中で間身体によって<身分け>され、学びの履歴を生成していくといえる。この学びの契機について、石黒(1999)は、「感覚」を手がかりとしていた。Suzuki(2005)も運動の意味生成の中核には運動する感じがあることを報告している。

すなわち、従来体育では達成や競争などの快感に着目し、運動の特性を捉えてきたが、今後はそれだけでなくイリクス(めまい欲求)やパイディア(未分化)な活動など、これまで体育では不必要とされてきたり、軽視されてきたものにも注目し、他者やモノ、コトに身をゆ

表1 心身一元的な存在としての身体に着目した体育の研究

	目指す身体性	研究の特徴	考察
久保(2005)	「身をもって共感(共鳴・共振)できるからだ」	他者性への気づきから、からだの学びを捉える	身体のかかわりとしての学びを他者性の獲得の中で取り上げ、検討している
杉本(1997)	異化と他己を通し、間身体的な存在としての身体の認識		
滝沢(2005)	賢い[からだ]		
石黒(1999)	主体として、他者・モノ・自己との共感的な関わりのある「プレイする身体」	他者・モノ・自己との関わりの生成契機は運動する「感覚」であるとする	「私」と他者が互いに主体として<身分け>する中で立ち表れた間身体的な感覚(イリクスなど)を重視

だね、働きかけられ感じる間身体的な感覚が重視されるべきであろう。これは、いわば感覚によって運動の意味が生成されることを意味し、この感覚とは「私」と他者が互いに主体として＜身分け＞する中で、間身体的に立ち現れたものであることを意味していると言える。

3.2 授業実践からみる学びの姿

検討対象①

小学校5年生 SP運動（田中、2007）＜ソフトバレーボール（ボール運動）＞

田中（2007）は、活動しながら思考し、主題とする運動にかかわる認知を感覚的に高めるようにする運動として、SP運動（Sense Perception：感覚運動）を授業に導入した。具体的には、“人やモノにぶつからないようにボールを投げ上げキャッチしたり、弾いて移動する”という活動や、“チームでボールを落とさないようにキャッチと弾くを使って移動する”といった活動が行われた。ここでは、「仲間とボールとの空間（安全・位置・関係）を認知すること」、「次の動きを予測して、仲間と連動して動くこと」、「ボールの落下地点に身体を移動してしっかりキャッチすること・ボールを弾く心地よさを味わうこと」への感覚的な気づきをねらいとしている。

子ども達は、SP運動を通して、投げ上げたボールの真下に身体を入り込ませたり、仲間との位置関係を意識したり、空間を感覚的に認知していった。また、ボールにかかわる他者と連動して動く戦術的な気づきを生んだ。さらに、「弾くだけでつなごう」「下から弾くといい」といったボールの特性と単元のゲームを行う上での手段としての技能に意味付与をしていった。SP運動は毎時間授業の始めに短い時間で行っていたが、これによって子ども達は自然と1つのボールに連動して動いていくようになり、SP運動が場への一体感を生むようになった大きな要因であることを報告している。

これは、SP運動の課題に向かう中で、同じ

空間で共に動く他者とのぶつかりそうな感覚や、他者を感じながら落ちてくるボールを拾う感覚などによって、間身体的な場が生成され、「ボールを落とさない」や「ボールをみんなでつなげる」、「他者とぶつからないように動く」といった運動の意味が生成され、「ボールの真下に身体を入り込ませる私」や「他者を感じながら間隔を保って動く私」へと自己が＜身分け＞していったものといえる。そして、単元が進み、投げ上げたボールの真下に身体を入り込ませるなど、クラス全体に新たな姿現れるころには、「私たち」として共同体自身が身分けし、学んでいたといえる。だからこそ、田中が報告するように、SP運動を続ける中で、子ども達は自然と1つのボールに連動して動いていくようになり、場への一体感が生まれるようになったのである。

検討対象②

小学校6年生 水の不自由さを楽しむ世界づくり（成家ら、2009）＜水泳＞

成家（2009）は、「水の不自由さ」を水泳ならではの面白い世界と捉え、「水の心地よさ」や「水の不自由さ」を探求し、感じることを中核にした授業を実践している。この中で子どもたちは、単元初めはもぐったりクロールで泳いだりして水の感触を楽しみ、次第にグループで鬼ごっこや飛び込みをしたり、何人かで動きを合わせてイルカジャンプから潜水などをするようになったと報告されている。成家（2009）は、このような関わりの変化を1.「無作為に水の感触を確かめ、遊んでいる状態」から2.「遊びの集団化」、3.「遊びの集団化とゲームの工夫」、4.「『遊び』から『心地よさ』へ」、5.「心地よさの『出会い』と『変化』」、6.「心地よさの『出会い』と『変化』、『拡がり』」へ、とまとめている。

これは、水とのかかわりにおける、水に浮く・沈む感じや、水の中を進む感じなどの固有の感覚を探求する中で、水と自己と他者の間身体

的な場が生成され、そこでの「水に浮く心地よさを感じる」や「友だちと動きを合わせる」などの運動の意味の生成によって、「ゆったりと水に浮く私」や「潜水で進む私」へ自己が<身分け>したものと見える。なお、この固有の感覚とは、水とのかかわりにおいて、間身体的交流によって意味理解された私たちの公共性によって意味付与されるといってもよい。すなわち、この固有の感覚は「私たち」の学びとしてクラス全体が<身分け>し、学んでいたことといえる。この<身分け>によって、泳ぐという行為が生成されたと考えられる。

これは検討対象①での<身分け>のプロセスと同様であったといえる。

以上から、間身体性からとらえる学びの姿、学びの内容は、モノや他者との関わりによる感覚から間身体的な場が生成され、そこにおける運動の意味の生成によって、<身分け>が行われるというものであるといえる。すなわち、内容を捉えていくためには、これまで欠落していた「運動する感覚による間身体的な場の生成」という視点を持たなくてはならないことが明らかとなった。

4. 結論

研究の結果、学びはかかわりによる集団的できごとであり、学習内容を把握する為の手がかりとして間身体性が鍵概念となることが明らかとなった。また、学びは間身体的な場における自己・他者・モノとのかかわりによって「私」が<身分け>し、さらに共同体としての「私たち」が<身分け>するという構造を有しているといえた。このことから、「自己-他者-モノ」とのかかわりにおける間身体的な場において、感覚体験やそれに基づく運動の意味によって<身分け>が誘われることが見出された。そこで、学習内容を考える上で、当該単位における運動の固有なおもしろさの中で味わうことができる

「運動すること」との関連から「運動の感覚」・「場の生成」・「運動の意味」という視点から、間身体的な関係の中で生まれる出来事として学習内容を設定しなければならないことが明らかとなった。

心身一元としての身体の学びを保障するために、「自己-他者-モノ」のかかわりにおける間身体的な「動きの感覚」・「場の生成」・「運動の意味」という3つ視点に注目して学習内容を考えていく必要がある。

引用・参考文献

- 1) Griffin, Butler(2005) Teaching Games for Understanding: theory, research, and practice. Human Kinetics;USA. p.37.
- 2) 細江文利 (1999) 子どもの心を開くこれからの体育授業. 大修館書店. pp.26-27
- 3) 市川浩 (1993) <身>の構造—身体論を超えて. 講談社学術文庫
- 4) 稲垣正浩 (2005) 「からだ」はどのように捉えられてきたか—近代的身体からの離脱と移動. 体育科教育. 第53巻第3号. pp.18-21
- 5) 石黒和仁 (1999) 「体育学習における身体論の検討」. 平成10年度上越教育大学修士論文
- 6) 川口啓 (2000) 「『体ほぐし運動』への期待—授業化の三つの条件」体育科教育第48巻8号 pp.10-13
- 7) 木村敏 (1988) 「あいだ」. 弘文堂
- 8) 久保健 (2005) 「権利としての子どものからだを見つめる—佐々木賢太郎の実践から、今の子どもと体育実践を読み解く」体育科教育第53巻2号pp.22-25
- 9) Lave & Wenger 佐伯胖訳 福島真人解説 (1993) 「状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加」産業図書
- 10) 松田ら (1997) 「スポーツ文化と教育—人間とスポーツの新たな関わりを求めて—」学術図書出版社
- 11) 文部省 (1998) 小学校学習指導要領. 東山書

- 房
- 12) 文部科学省 (2008) 小学校学習指導要領. 東山書房
 - 13) 文部科学省 (2008) 小学校学習指導要領解説 体育編. 東山書房
 - 14) 村田芳子・川口啓・山本俊彦・五十嵐淳子 編 (2001) 『『体ほぐしの運動』活動アイデア集』教育出版
 - 15) 永島惇正 (1998) 学校体育のこれまでとこれから—スポーツ教育の視点から—. 体育科教育. 第46巻第4号. pp.18-21
 - 16) 成家篤史・鈴木直樹 (2007) 「関係論的アプローチによる水泳授業の実践提案～水の不自由さを楽しむ世界づくりを目指して～」. 埼玉体育スポーツ科学 第3巻.
 - 17) 成家篤史・鈴木直樹・寺坂民明 (2009) 「関係論的学習観に立つ『感覚的アプローチ』に基づく跳び箱運動の授業実践～『動く感じ』を中核とした意味生成に着目して～」. 埼玉大学研究紀要第58巻1号 (受理済)
 - 18) 大澤真幸 (1996) 岩波講座 現代社会学第4巻 身体と間身体社会学, 岩波書店, pp.239-254.
 - 19) 小澤治夫 (2005) 生徒が変わる中・高校の学校体育をデザインする. 体育科教育第. 53巻第3号. p.30.
 - 20) Light, R (2009) Complex Learning Theory Journal of Teaching in Physical Education, 2008, 27, 21-37 Human Kinetics, Inc.
 - 21) 佐伯胖 (1995) 『『学ぶ』ということの意味』. 岩波書店
 - 22) 齋地満 (2006) 運動の意味の生成を支援する評価に関する実践的研究. 平成18年度埼玉大学修士論文. p.20.
 - 23) 佐藤学 (2000) 『『学び』から逃走する子どもたち』岩波ブックレットNo.524
 - 24) 杉本厚夫 (1997) 『『運動技術』指導の疑問—できればそれでよいのか—』体育科教育第45巻2号 pp.15-19
 - 25) 杉本厚夫・勝見藤一 (2000) 学校体育における身体観の変容. pp.49-58.
 - 26) Suzuki, N (2005) “Study into the process of how students generate meanings of physical behaviour”. Invitation to the 6th German-Japanese Symposium of Sport Scientists. Institut für Sportwissenschaft, Friedrich-Schiller-Universität Jena, Seidelstrasse 20, 07749 Jena, Germany
 - 27) 鈴木直樹 (2008) 関係論に立つ小学校体育の授業づくり—豊かにかかわりあいながら, 運動する喜びを味わうことのできる体育学習をめざして—. 大学教育出版.
 - 28) 高橋健夫 (1998) 「体ほぐし」—そのねらいと内容. 体育科教育. 第46巻第10号. pp.76-77.
 - 29) 高橋健夫 (2000) 体ほぐしの運動. 体育科教育別冊⑱48(5). p.142.
 - 30) 高橋健夫 (2001) 往復書簡—返信 教材の一人歩きにならないようにすることが大切なのでは… . 体育科教育. 第49巻第5号. pp.13-15
 - 31) 高橋健夫等 (2002) 体育科教育学入門. 大修館書店. pp.39-47.
 - 32) 高橋健夫 (2005) これからの学校体育を構想する—体育科の基本的な役割を中心に—. 体育科教育 第53巻 第3号. pp.14-15
 - 33) 竹田清彦, 高橋健夫, 岡出美則 編著 (1997) 「体育科教育学の探究—体育授業づくりの基礎理論」大修館書店
 - 34) 滝沢文雄 (2005) 「技(コツ)を習得する [からだ] から見えるもの」体育科教育第53巻2号 pp.26-29
 - 35) 田中勝行 (2007) 『『かかわり合い』を重視したソフトバレーボールの授業』(子どもと体育 No.140 pp.6-9)
 - 36) 寺坂民明・塩澤榮一・鈴木直樹 (埼玉大学研究紀要第58巻1号. 2009受理済) 『『感じる』ことを学習内容の中核としたハードル走』

(2009年9月30日提出)
(2009年10月16日受理)

A examination about the learning contents in P.E. :A cue to change the learning contents to “doing” from “working”

Nozomi SAKUMA and Naoki SUZUKI

Keywords : learning contents, physical education, the person as existence of mind and body, constructivism, relation.

The purpose of this study was that the learning contents were examined from the viewpoint of the person as existence of mind and body, in order to realize classes “considering physical and mental aspects in an integrated matter” that is a major premise of the object in P.E..

The study was researched by both the examination of literature and the case study. First, the learning theories in constructivism was examined from the viewpoint of the person as existence of mind and body. The structure of learning in physical education was constructed based on the result. Next, the case study for classes which takes a position on the complex theory learning (This is a idea based on constructivism.) was carried out. The learning was examined according to the structure of learning in this lesson. It found the cues to grasp “what students are learning / to learn”. As mentioned above, the following things became clear.

1. The learning contents are regarded as a collective events -they are the seamless relationships between the living players.
2. The leaning contents were generated by <a constituent part of the living of a fusion of body and mind> -it puts students in is a indirect situation among “self”, “others” and “artificial”. Simultaneously, it is constituted by carrying out <a constituent part of the living of a fusion of body and mind> of the “us” who was constituted as a community.
3. It is necessary to grasp the learning contents of study from the point of view of an indirect relationship among “self”, “others” and “artificial”. - “the sense of playing” - “the creation of a situation in playing” - “The meaning of playing”